テキスト『正邪録（３）』

古文書にみる幕末社会

聖徳大学オープンアカデミー公開講座

はじめに

二〇〇三年、本学の生涯学習施設聖徳大学オープン・アカデミー(以下、通称ＳＯＡと表記する)で「古文書にみる幕末社会」をテーマに、古文書解読講座を担当するようになって、一四年が経った。その短くもない講座には、開設間もないころからお付き合いをいただいている方々も少なからずいらっしゃる。この場は、担当者にとっても、「日々の研鑽を怠るな！」という警咳を与えてくださる貴重な場ともなっている。

受講当初は、全くの初心者ないしは、初心者に近い方々も、今では、一人前の読み手となり、中には、当方以上に実力を付けられた方も何人もいらっしゃる。それは、担当者にとっても密やかな誇りとなっている。

今まで読んできた史料は、わたくしが、千葉県史の編纂業務に携わっていたこともあって、当初は千葉県文書館所蔵の「おとずれ文庫」中の王政復古当時の布達類、第二次長州征伐の際の戦闘情報を記した情報集、さらには真忠組事件関係史料をはじめ、県史でお世話になった先輩方を通じてご教示いただいた上総地域の一連の文書群(なかには、茂原にある高橋喜惣治家に所蔵されていた竪冊文書で、禁門の変直後に、一橋慶喜が江戸本邸を事実上切り盛りしていた義母にあたる徳信院に変の状況を書き認めた書翰の写しもあった)、その他にも整理に関わった一橋徳川家史料中の文書群、マイクロフィルム化されていた佐倉堀田家文書をテキストにして解読したこともあった。

当初は、くずし字のきれいなもの、内容の分かりやすいもの、といった選択基準でテキストに相応しい史料を探し、選んでいたが、受講生の方々の力量が向上するにつれて、そうした配慮は後景に退き、内容の面白いもの、興味深いものをテキストに選ぶようになった。事前の準備に労力を割かれるようになっていったが、その分担当者であるわたくしの関心も深まり、より一層楽しく感じられるようにもなった。

そうなってくると、受講生の方々の間から史料の提供を受けることが出てきたり、一年に一度実施している古文書閲覧も兼ねた施設(毎年一度史料を見せて下さる歴史館や博物館を訪ねている)見学で、見せていただいた史料をテキストに使用することも出てくるようになった。古河歴史博物館の国指定重要文化財・鷹見泉石関係資料からオランダ風説書、鷹見泉石の意見書、親交のあった渡辺崋山書翰などをテキストとし、近世後期の蘭学の役割、近世後期から幕末にかけての対外情報の豊富さについて認識を新たにするという知見も得ることができた。また埼玉県立歴史と民俗の博物館を訪れた際には特設展に展示されていた慶応二(一八六六)年六月、秩父で起こった世直し一揆の情報集である、「丙寅土寇日記・丙寅晩夏松陰筆録」をお借りして全冊翻刻したことも記憶に新しい。そこでは情報集を作成した松陰は、どこでこの情報集を書いていたのか、その可能性のある場所を探る、といった文書の解読本来の学習からは、離れてはいるものの、地図を広げ、いろいろ詮索したこと、その過程で、埼玉の地域的特性についても学ぶことができたこと、学習の範囲は文書解読にとどまらない、広がりをもつものともなっていった(古文書読解はあくまで歴史を復元するツールであって、本来古文書学習とはそうした広がりを必然的にもつものである、というのが歴史学を生業とするわたくしなりの自負である)。

そうしたおり、今年がＳＯＡ開設二五周年にあたることから、いくつかの講座をホームページで紹介するという話があることを聞き、この機会にこれまで読んできた史料の翻刻をホームページにアップしてもらって、わたくしたちの成果を広く社会に還元することを通じて、史料を共有するとともに、ご批判をいただき、今後の学習に生かしていきたい、という希望が、受講生の方々の間から提案された。その際、何を最初にアップするか、というところで、本講座で最もボリュームがあり、内容も豊富であった、幕末の秋田藩士が書き遺した情報集である『正邪録』（全三巻）の翻刻を選んで、その準備に取り掛かった。電子媒体ならではのさまざまな条件があること、パソコン技術に通暁していないこと、など種々の壁にぶつかりつつも、ＳＯＡ事務局である生涯学習課の方のご指導をいただきながら、何とかアップにこぎつけることができた。

今回アップする『正邪録』第一巻は、安政四（一八五七）年冬から文久三（一八六三）年四月までを対象にしたもので、主に京都の政情を中心に、国政に関わる政治情報が、秋田藩という「眼」、を通してまとめられている。幕末という時代をその時代のなかで実感する上でも、好個の史料といえよう。

今後、第二巻・第三巻の順でアップしていく予定で、引き続きその作業を進めていく予定である。さらにその後も、講座で読み上げた史料を順次アップしながら、ページを繙いてくださった皆さんのご批判を糧に学習を続けていきたい、と考えている。

最後になりましたが、アップに向けての作業などに有形・無形のご協力と励ましをいただきました「古文書にみる幕末社会」にご参加いただいている受講生の皆様に改めて感謝申し上げます。そして、この間、一貫して相談に乗っていただき、些細な技術的な問題にさえ、対応に苦慮する私たちを温かく見守り、最後まであきらめることなくご指導いただいた、生涯学習課の中原弘喜さんに、改めて感謝いたしますとともに、厚くお礼申し上げます。

二〇一九年十月

ＳＯＡ講座「古文書にみる幕末社会」

担当　　文学部教授　大庭　邦彦

テキスト『正邪録』について

貝塚家所蔵になる『正邪録』は三巻からなっており、幕末期に同家の当主であった清直が取まとめた情報集である。

清直は、出羽久保田（秋田）藩に仕える武士で、当時、政務所物書という役職に就いており、職務上、藩庁に上げられる種々の情報を知りうる立場にあった。

『正邪録』は、清直が、そうした情報を職務の合間に筆録したものと思われる。そのことは、第一巻の最初に収載されている水戸斉昭が当時関白であった九条尚忠に提出した建言書を筆写した最後に「万延元申年四月十四日　宿直之時写終ぬ　貝塚清直」と付記しているところからもうかがえる。

『正邪録』全三巻を概観してみると

一　第一巻　安政四（一八五七）年冬～文久二（一八六二）年四月

二　第二巻　文久三（一八六三）年五月～同年九月

三　第三巻　文久三（一八六三）年十一月～慶応元（一八六五）年九月

と、各巻はおよそ時代順に編まれており、収載されている内容をみると孝明天皇の勅書、それに対する十四代将軍家茂の請書をはじめ、水戸斉昭や毛利敬親といった有力大名層の意見書・歎願書、幕府の出した触達類、各藩探索方の収集した情報の聞書きから、横浜の貿易商人の老中への駕籠訴状、さらには日本橋に張り出された張り札、投げ文に至るまで、幅広い階層の人々が書き記した情報が多様に収載されている。

そしてそれらは、ホットな政治問題に関わる情報であることから、当時の政治状況のなかで、藩の政治的立場を決定していかなければならなかった諸藩の情報収集がどのような内容と質を有していたかを検討するうえで、意義ある史料と考えることができる。いま一点、私たちは、幕末の著名な政治的事件がどのようなものであり、その歴史的意義が何であったかについては、既に既知の歴史事項として理解できている。しかし、その歴史的事件の只中にリアルタイムで遭遇していた人間たちにとって、その事件がどのようなものであったのか、その全貌を俯瞰しながら客観的に理解することが如何に困難なものであったかが、逆によく分かるような事例も読み取れる。

ちなみに『正邪録』は、清直一人の手になるものではない。読んでいただければ分かるが、手の異なる複数の記録者がいたと思われる。こうした点を勘案すれば、『正邪録』は、貝塚清直の個人的な作というよりも、久保田藩の政治的必要性から清直の職務に関わって作成された情報集という、半ば公的な性格を有する記録と考えることができるかもしれない。

正邪録全三巻の内、第一巻と第二巻は既に公開を終えたところであるが参考のためその目次を左に掲げる

正邪録（1）の目次

（一）　水府老公より琵琶の函入関白殿下秘奏之策・・・

(四)　井伊大老を失った彦根藩伺い書・・・

（四十一）長州侯建白自分鷹司殿下へ持参・・・

(二十三) 長州之藩退京之砌建白・・・

文久三年(一八六三)一月　義尭公御上京。その間徳大寺様御家来香川陸奥助景恒へ
歌学入門
文久三年(一八六三)三月　義尭公の御供にて京都発、江戸藩邸。四月秋田着
元治一年(一八六四)八月　義尭公御上京に付き江戸へ。義尭公上京延引に付、十二月秋田着
慶応四年(一八六八)七月　秋田藩古内左摠次手の戦士として戊辰戦争に出陣
明治三年(一八七〇)一二月～明治二一年(一八八九)八月
秋田藩陸軍中尉、秋田県陸軍中尉、秋田第五大区二小区
戸長・仙北郡書記等を務める
明治三七年(一九〇四)一二月七日　没。七十五歳

以上